

タイトル	北海学園大学人文学会第2回記念シンポジウム記録 人文学の新たな展開に向けて：「環境文化」からの 視点
著者	手塚，薫；TEZUKA，Kaoru
引用	北海学園大学人文論集(59)：47-52
発行日	2015-08-31

人文学の新たな展開に向けて ——「環境文化」からの視点——

手 塚 薫

社会や大学では少し前から一般教養は役に立たないという風潮が支配的になっています。その結果、いわば基礎科学の軽視が顕著になっているような気がします。専門主義時代の到来とともに幅広い教養の意義が見えにくくなっている現在だからこそ、人文主義の重要性が再認識されてしかるべきでしょう。

安酸敏眞先生がお書きになった『人文学概論』を一読して、「教養」復興の必要性を強く意識させられました。ここでの教養とは、もちろん単なる知識の伝達ではなく、自立的な人間形成に資する全般的教養の修得のことです。そうはいっても、社会に、とりわけ、若い世代に人文学的教養の意義を認識してもらうためには、その必要性をわかりやすく伝える工夫も求められるでしょう。その意味で『人文学概論』の出版はまさに時宜になっていたといえましょう。以下では、本書を拝読して感じた点を3つに絞って述べてみます。

1 人文学と人類学あるいは民族学の類似性について

本書にしばしば登場する種々の用語、例えば事項であれば、「異文化」「未開社会」「トーチズム」「文化相対主義」「人類学」、人物であれば、「モルガン」「マリノフスキー」「タイラー」「ベネディクト」等、これらは文化人類学の最重要キーワードとも重なり、人類学も欧州に端を発する「人文学思想」の学恩を疑いなく受けていることを実感しました。本書巻末所収の「人文学に関連する文化史年表」中の「人文学関連事項」欄に東洋出身の思

想家は数えるほどしか登場しません。人文思想そのものが欧米に起源を有しているからでしょうが、ヨーロッパ中心主義に傾いているようにも見えます。もちろん人文思想の欧州起源という通説的理解を見直す不断努力は必要です。ヨーロッパ中心主義を相対化したところから新しい人文学の流れがはじまることでしょう。

1859年のダーウィンによる進化論の提唱自体は、一つのきっかけではありますが、進化論的な思考がそのときはじめて誕生したわけではありません。奴隷貿易をはじめとして西欧を頂点として世界を序列化する論理が待望されていました。H. スпенサーの社会進化論と連動して当時民衆の間に流布していた観念的な進化論に科学的な裏づけを提供しました。これは自立の根拠を探していた民族学(人類学)にとっても重要な出来事でした。おりしも、世界各地で民族学博物館の建設ラッシュが見られます。世界最古の民族博物館はオランダのライデンで1862年に開館し、それ以降イギリス、ピット・リヴァース博物館の1883年開館までに、主要な民族学博物館は全て完成しています。これらの博物館では、進化の過程をなぞった異文化の表象を目的とした展示構成が主流となっていました。

このように、進化論は、単に生物にかかわる理論の構築にとどまらずに、19世後半の社会や思想にきわめて大きな影響をおよぼしました。文化人類学はまさにそのような時代背景のなかで誕生しました。

J. フレイザーは呪術→宗教→科学という思考様式の発展段階を考え、L. H. モルガンは世界中のあらゆる社会が一定の段階(原始→野蛮→未開)をへて、やがて文明に到達するという西欧を進化の頂点とする単系的社会進化論を唱え、E. タイラーのアニミズムに始まり多神教をへて一神教に到達するとの宗教進化論と並んで「社会進化論的普遍主義」の立場を鮮明にします。

しかしながら、新しい文化人類学の流れは、この考えを否定することから最出発しました。19世紀の要素主義的・発展主義的・進化論的研究を如何に乗り越えるかが20世紀の人類学の課題とされたのです。

このように、人類学が大きく変貌を遂げるもととなった「進化論」への

言及が本書のなかでなされていないのはやはり気になりました。

2 イスラーム世界の功績

現在一般的に理解されているような、神中心的な中世の束縛から人間精神を解放して、世界と人間についての近代的な理解の出発点がえられたとする「ルネサンス人文主義」は、近代になって創造されたものだろうぐらゐに漠然と考えていた私は、本書から、キリスト教的中世と近代的なものが混ざり合った土壌のなかから当時の人文主義者たちによって着実に進められていた運動であるとの指摘には目を見開かされました。

12世紀ルネサンスの背景について本書43頁では、イスラーム世界からの学問の流入も取り上げてはいますが、それよりも「カトリック・キリスト教が西欧社会にしっかりと根を下ろし、社会ならびに文化全般がいまやキリスト教的に組織化されるようになったこと」が一番重要だとする指摘をおこなっています。近代的な精神はキリスト教的合理性の素地があって発展した点を重視しているのでしょう。

私自身は、西洋におけるルネサンスの動きには、イスラーム世界との交流がより重要だったのではないかと考えます。イスラームの知の爆発ともいうべきルネサンスと共通の現象がその前の9～10世紀のイスラーム世界に起こっていました。マホメットの死後直ちに始まった「アラブの大征服」とよばれるアラブ世界拡張の時代に各地の異文化と接触し、知的活動の発展をもたらしました。古代ギリシア、ヘレニズム、インド、ペルシア等で書かれた原典の活発な翻訳活動によって、古代からの偉大な知の体系が散逸を免れたことは疑いがありません。イスラーム社会は様々な地域との交流をへて多様な知識を貪欲に吸収し、さらにそれを発展させたにもかかわらず、その事実はなぜか不当に評価されてきたのです。この反省を踏まえた西洋人による再評価として特筆すべきなのは、1993年10月27日のオックスフォード大学イスラーム研究センターにおけるチャールズ皇太子の講演「イスラームと西洋」でしょう。その抄訳を以下に掲げます。

イスラームの性格について西洋の側に多大な誤解があるとすれば、我々の文化や文明が如何にイスラーム世界に恩恵を受けているのかに關して大いなる無知があるためである。それは我々が受け継いだ歴史の縛りに起因する怠慢である。中世イスラーム世界は学者や知識人が活躍した時代である。しかし、我々はイスラームを、西洋の敵として、異端な文化、社会、信仰として見がちなので、イスラームが我々の歴史に直接的な関連性を有していることを無視し、あるいは消し去ってしまいがちである。例えば我々はスペインにおける8世紀から15世紀までのイスラーム社会・文化の800年の重要性を過小評価してきた。暗黒時代の古典的知識の保存やルネサンスの最初の開花に対するムスリムスペインの貢献は長らく認識されてはきた。しかし、イスラームスペインには、ヘレニズム期の知識が後に出現する近代西洋によって受容されるために蓄えられていた単なる貯蔵庫以上の意味がある。ムスリムスペインは古代ギリシャ・ローマ文明の知的な中身を集めたり保存したりしただけではなく、その文明の上にさらなる解釈を積み上げ、発展を遂げ、科学、天文学、数学、代数学、法律、歴史、医学、薬理学、光学、農学、建築、神学等あらゆる分野においてきわめて重要な貢献を果たしたのである。

今日のヨーロッパが誇りにしている特徴の多くは、ムスリムスペインに端を発している。外交、自由貿易、通航自由、学術研究の方法、エチケット、ファッション、代替医療、病院は、都市のなかの都市に由来する。中世イスラームは非常に宗教に寛容であり、ユダヤ教徒やキリスト教徒がその信仰を実践することを許容したが、不幸にもそれは数百年たっても西洋が真似の出来ないことであった。

イスラーム世界の功績をなかなか認めたがらない風潮は近代ヨーロッパになってからも散見されます。劣ったアジア（神權的な専制）との対比のなかでキリスト教文明は賛美され、植民地主義的な言説へ組み込まれていきます。チャールズ皇太子が、イスラーム世界は古代の知識の貯蔵庫以上

の意義を有していることに触れたのはまさに慧眼というべきでしょう。

3 翻訳とは何か

本書142頁からは、翻訳とは何かというテーマを扱っています。翻訳とは、「言語的・文化的な運用・移転の試みにほかならない」わけですが、その際に問題になるのは、本書でも指摘されているように、「一つの言語・文化から他の言語・文化へと移転する際に、完全な一致あるいは対応が存在しないために、意味の変容が生じざるを得ない」という点です。つまり、文化の翻訳とは、主体的な読み、すなわち創造的なプロセスにより、A言語・文化をB言語・文化に移そうとする場合、AでもBでもないCができあがることになります。

ここで、2014年7月3日付朝日新聞記事の「オピニオン」（識者があるテーマについて異なる意見を表明する）で、識者による大学教育の英語化の是非が取り上げられており、興味深かったのを紹介します。前提となるのは、安倍政権の後押しにより、大学で教養や専門科目を英語で学ぶ動きが顕在化していることです。これには国際競争力を強める狙いがあるとされています。

国際教養大学長の鈴木典比古氏は、日本は翻訳文化では生き残れないと述べます。日本の大学は長い間、西洋の言語で書かれたものをいったん日本語に訳し、その内容を日本語で解釈し考えをまとめることを続けてきました。しかし、オリジナルの英語を日本語に置き換えてから理解すると、なによりも概念や論理がずれてしまいがちであることを問題視しています。

これに対し、元岐阜大学教授で英語教育研究者寺島隆吉氏は、私たちは母語である日本語でこそ深く思考できると主張します。母語を耕し、本質的なものに対する知的好奇心を育むことこそが、大学が果たすべき大きな役割だということです。

日本は明治期の知識人たちの血のにじむような欧米諸語の翻訳（もとも

と存在しない語彙の創出)の結果、大学院の教育までを自国語で達成できる、アジアでは例外的な国であることのありがたみを多くの日本人は感じていないのではないのでしょうか。高等教育を国際語の「英語」で実施することは、合理的であるかもしれませんが、母国語で実施しないことは、母国語の豊かな発展の可能性の芽を摘んでしまうことにつながるのではないのでしょうか。インドでは日本とは逆に、大学教育をインド固有の言葉でおこなうべきだとの議論が近年高まっているとききます。この二人の識者の議論を聞くと、「ズレ」をおそれるか否か、「ズレ」があると世界から取り残されるのかという疑問に想到します。

2010年に7年間におよぶ宇宙の旅から無事帰還して世界の注目を集めた小惑星探査機「はやぶさ」はハイテク技術のたまものですが、多くの町工場の職人がこの探査機の製作にかかわっていました。職人の多くは留学を経験せず、日本語をベースにして専門技術や専門知識を学んだことでしょう。「ズレ」はむしろ知的イノベーションの近道とプラス思考でとらえることはできないのでしょうか。知的イノベーションとは既存の土俵の枠組み上にある事物と事物の間の約束事を、あえてそれまでとは違う位相に定位させ、あらたな創造的思考を獲得することであると捉えるなら、創造的思考の多くは自国語を運用する領域でこそ活性化するのではないのでしょうか。明治期における森有礼と馬場辰猪の論争を彷彿とさせる古くて新しいこの種の英語公用語化論については、日本の行く末にかかわる問題ゆえに十分な議論がつくされることを願っています。